研究ノート

「ベルリン自由学校」について
──最初のフリースクール──

On the *Jüdische Freyschule* in Berlin──the first *free school*──

藤　井　良　彦
Yoshihiko FUJII

1. はじめに

オルタナティヴ教育の名が聞かれるようになったのは、日本にシュタイナー学校を紹介した子安美知子の『ミュンヘンの中学生』(1984年)の影響であろうか。現在、日本には七つのシュタイナー学校がある。しかし、それはまたフリースクールの側からも聞こえる。日本において最初に設立されたフリースクールは「東京シューレ」であるが、それを母体とした「シューレ大学」はオルタナティヴ大学を標榜している。シュタイナー学校とフリースクールを同列に扱うことはできないが、その多くがいわゆる「一条校[1]」ではないということ、そして最初のシュタイナー学校が「自由ヴァルドルフ学校」という名であったように、どちらも学校名に「自由」の名を冠していることからして一定の共通性もありそうである。

しかし、そうであればこそ、その「自由」とされる学校教育が、既成の学校教育から自由であるということ以上に積極的な意味を必ずしも持ちえていないところにこうした学校の問題点もある。たとえ、それが「自由な教育」とは区別されて「自由への教育」であるとしても、その「自由」の意味は依然として曖昧である[2]。この点、少なくとも言葉の上からすると、世界で最初に設立されたフリースクールである「ベルリン自由学校（Jüdische Freyschule)」は、その自由という言葉の積極的な意味を我々に教えてくれる。

2. 学校設立の経緯

「ベルリン自由学校」は、フリートレンダー(D. Friedländer, 1750−1834）とその義兄であるイッツィヒ（I. D. Itzig, 1723−1799）によって1781年に開校された学校である。「メンデルスゾーンによって創設された[3]」と指摘されたこともあるが、それは誤りである。メンデルスゾーンが設立に関与したことは事実だが、あくまでもこの学校はフリートレンダーを中心として設立されたものである[4]。

もちろん、フリートレンダーはメンデルスゾーンの「後継者」と言われるような人物である。この学校がメンデルスゾーンに始まったユダヤ啓蒙の理念を体現したものであることは間違いない。

フリートレンダー自身、学校設立の経緯について次のように述べている。「メンデルスゾーンはユダヤ人の豊かな子どもたちの教育を用意した。それは、彼の考えによれば、同信の者たちのうち才覚において際立った子供たちに必要な支えが与えられるように努めるものであった。そうした才覚はラビたちの好むところではなかったが、彼らの教育観は当時から既に慎重にも避けられ始めていたものである。運よく、1778

年に、裕福なユダヤ人の一人であったイッツィヒの父が、貧しい子供たちのための無料学校（Freyschule）をつくるために自宅を提供することになった。そこで、イッツィヒの長男と私フリートレンダーは、学校を設立する計画を立てて、実行に移すことにした[5]」。

ここでフリートレンダーは、父祖の代における「無料学校」の設立案に言及しているが、これが「自由学校」として実現したことの理由を明かすことが本論の目的である。

フリートレンダーはケーニヒスベルクで裕福な商人の家に生まれた。ケーニヒスベルク大学で学んだ後、1770年には学友のヘルツと共にベルリンへと旅立つ。ベルリンでは毎日のようにメンデルスゾーンの家を訪れていたようである。1772年には、貨幣鋳造業を営んでいたイッツィヒの婿養子となり、プロイセンにける公民権を獲得、1776年には絹織物工場を設立している。

また、1806年には、ユダヤ人としては初めてベルリン市の参事会員となり、ゲマインデの長を務めもした。国王に改革を訴えるなど政治的に大きな影響力を持ち、カトリックへの「改宗」騒ぎを起こしたことでも有名である[6]。

さて、そのフリートレンダーが学校を設立する計画を立てたのは1778年のことであった。

この学校の特徴としては、次の三点が挙げられる。まず、この学校は独自の「教科書（Lesebuch）」を持っていた。次に、この学校は出版社を経営してもいた。そして、この学校は「自由学校（Freyschule）」という名を持っていた。

3. 教科書について

この学校で使われた教科書は、フリートレンダー自身によって作成された『ユダヤの子供たちのための教科書[7]』（1779年）である。この教科書は、まずは「ユダヤの子供たちのため」の教科書ということであるが、あまり子供向けのものとは言えない。この点は、当時の書評雑誌においても、「内容はよく吟味されたものであるが、しばしば子供たちの理解力を超えている[8]」と控えめではあるが指摘されている。こうした評価は当時においては一般的であったようだが、現代においても、「特定の年齢層に向けられたものでもなければ、はっきりとした教育上の事柄を伝えているものでもないように思われる[9]」と指摘されていることからして、この教科書の問題点は明らかであろう。

なぜなら、学校教育の近代化は子供向けの教科書を作成することから始まっているからである。この点、フリートレンダーが教科書を作成したことにはまた別の目的があったようである。

この教科書はフリートレンダーの伝記を書いたリッターによって、「二冊は残っているだろう[10]」と指摘されたものだが、1926年には、「もう残っていないだろう[11]」と言われていたものである。しかし、実はベルリンの図書館に一冊だけ残されていたのであり、それが1927年に出版されたのである。

当時のプロイセンの「村落学校」では、ヘーンの『ベルリン綴り字および読み方教科書[12]』などが教科書として指定されていた。これは、1763年に出された有名な「村落学校通則」によるものである。しかし、1774年にバゼドウが私塾である汎愛学舎をデッサウに設立してからは[13]、独自に選定された教科書を使う学校も出てきた。

そこで、フリートレンダーとしても、例えばアルファベットの教え方に関しては、バゼドウの『子供たちのための小冊子[14]』（1771年）や、ロッホウ（ロヒョー）の『農村の子供たちのための教科書の試み[15]』（1772年）、『子供の友[16]』（1776年）、そして同じく汎愛派の一人であるカンペの『子供たちに読み方を教える新しい方法[17]』（1778年）などを参考にして教科書を作成したのである。これには、その他にもおそらくズルツァーの『練習本[18]』（1771年）やヴァイスの『新しいABC本[19]』（1773年）などが参考にされたことだろう[20]。

当時のプロイセンの村落学校では、ヘーンの教科書以外にも、聖書やルターの教理問答書な

どが教科書として指定されていた。しかし、ヘーンの教科書がほとんど流通していなかったこともあり、実際の教育は聖書と教理問答書によりなされていた[21]。そのこともあって、授業はそれらの文言を読み上げてはただ暗記するだけの退屈なものであった。

これに反発したのがバゼドウである。バゼドウは1768年に有名な『提言[22]』を出版し、独自に教科書を作成することを宣言、その資金提供を諸国の名士たちに求めた。これには、ロシア帝国のエカテリーナ二世を始めとして、各国の君主や貴族、また自治都市の参事会員など多くの者が賛同し、1770年には二巻本の『初学書[23]』が出されることになった。

この「提言」には、メンデルスゾーンの故郷であるデッサウのゲマインデなども応じたようで、いくらか寄付金を提供したようである。そのためもあってか、『初学書』の支持者リストにはメンデルスゾーンの名も見られる[24]。

フリートレンダーによる教科書の作成が、こうした当時の教育事情の影響を受けてのことであることは間違いない。それが必ずしも子供向けのものでなかったとしても、学校を設立するために教科書を独自に作成するという発想はバゼドウの影響を抜きにしては考えられないことである。

また、この教科書の一つの特徴としては宗教教育が挙げられる。なぜなら、それは必ずしもユダヤ教に関する教えを説くものではないからである。この点においても、この教科書はバゼドウの教科書に倣っていたと言える[25]。

宗派性のない教育は、当時の学校教育事情を考えれば革新的なことであった。

当時のプロイセンでは、村落学校を中心として初等教育の義務化を進めていた。1750年には「ミンデン村落学校令」が公布されているし、1763年には有名な「村落学校通則」が公布され、ルター派の学校教育が定められている。また、1765年には同じような「通則」によってカトリック派の学校教育が定められている。そして、こうした学校はベルリンにあった「ルター派高等宗務局」によって監督されていた。

つまり、当時の学校教育は宗教教育を基礎としていたのである。その点、「ベルリン自由学校」にはキリスト教徒の教師もいたようであるし、或る時期からはキリスト教徒の生徒も在籍していた。

また、この教科書のもう一つの特徴としては、基本的にヘブライ語やヘブライ文字が使われてはいないことにある。ヘブライ文字が一度だけ使われてはいるが、教科書の本文は全てドイツ語によるのである。しかも、それはイディッシュ語ではない。

なぜ、イディッシュ語を用いてはいけなかったのか？

メンデルスゾーンは、或る人に宛てた書簡において次のように述べている。「このジャーゴンが少なからず多くの人たちの不品行（Unsittlichkeit）の原因なのではないかと思うのです。ですから、最近になって純粋なドイツ語を用いるようになった同胞たちの影響に大きな期待を寄せているのです[26]」。

つまり、イディッシュ語などを話していては社会に出られないということである。そこで、この学校はきちんとしたドイツ語の読み書きを教えるのである。メンデルスゾーンは14才になるまで、「正しいドイツ語（recht Deutsch）」の文章を読んだことはなかった[27]。イディッシュ語を「母語」としたメンデルスゾーンにとって、ドイツ語の読み書きを覚えることは決して簡単なことではなかった[28]。

しかし、まさに母語以外の言語を学ばざるを得なかったところに、言語政治学的な問題があったことは言うまでもない。「ユダヤの子供たちのため」の教科書は、ドイツ社会への参画を促すための教科書であった。ニコライなどは、「ユダヤ民族（Jüdische Nation）の子供たちのための非常に有用な教科書[29]」と述べているが、それはまたドイツというネーションを意識したものであったことを見逃してはならない。

残念なことに、実際のところこの教科書がどれほど「ベルリン自由学校」で用いられたのか

は不明である。とはいえ、フリートレンダー自身による次のような評価は軽視されてはならないだろう。「今ではもう忘れられているけれども、この教科書は公刊された当時はキリスト教徒の教養人たちの間で今日では理解できないほどのセンセーションを巻き起こしたものだ[30]」。

4. 汎愛学舎の失敗

ところで、教科書の作成から始まったバゼドウによる新教育であったが、実際に設立された学校は必ずしもその理念を体現していたわけではない。

バゼドウの思想は汎愛派と呼ばれる「ルソー以来の国民教育論の一分派[31]」である。それは、「人間性」を重視する点においてルソーの影響下にある。しかし、また「共益性」を重視する点でルソーを批判するものでもあった。

その思想に基づき、1774年にはデッサウに汎愛学舎が設立された。1776年に行われた汎愛学舎の公開授業には、メンデルスゾーンも呼ばれている。この公開授業には有名な教育者であったロッホウやカンペたちも参加していたことからして、汎愛派の主要なメンバーであった彼らとメンデルスゾーンが交流することもあったと推測される。

しかし、汎愛派の思想は、また次のように指摘されるようなものでもあった。

つまり、「〔その思想〕は、絶対主義諸国家が、富国強兵政策を強力におし進めつつ、たがいに相争い、相戦いつつあったこの時代に、それぞれの国家権力の重商政策による保護のもとに繁栄しつつあったブルジョア階級の保身術的処世術を人類主義的理念によって美化したものといっていいものであろう。それがバゼドウの人生観であり、教育観であった。それは、この時代における“資本主義的精神”であったといっていいかも知れない[32]」。

そこで、同じく汎愛派の一人であったロッホウなどは、その著『民衆学校による国民的性格について[33]』(1779年）において村落学校の「国民学校（Nationalschule)」化を提言している。ロッホウは、村落学校を「民衆学校(Volksschule)」の典型として、国民教育を推し進めることを考案したのである。これは、「ヒューマニズムの教育から、ナショナリズムの教育への転換[34]」という18世紀後半における教育思想の展開からして仕方のないことであるが、残念なことに汎愛派の理念からの逸脱、或いはその限界を示すものでもあった。この点については、ロッホウが貴族領の領主であったことも無関係ではない[35]。

「汎愛主義の教育思想を実現するにふさわしいのは、国家だけであった[36]」という指摘は、宗教教育の否定が国家による教育の肯定とならざるを得なかったという、この思想の大きな矛盾点をよく示している。

この点をよく見抜いていたのは、メンデルスゾーンであった。

メンデルスゾーンはバゼドウに宛てた書簡において次のように述べている。「貴殿は、人間的な権利を守り、真理と理性的な自由を愛し、国家に尽くす意志と能力を持った理性的な人間を教育されようとしている。しかし、そんなことは、ユダヤ人（Jude）の置かれている立場からすれば考えようにも考えられないことなのです。ユダヤ人が人間的な権利を守ることを学べるのですか？ユダヤ人が階級的な抑圧のもとでもそう惨めではなく生きていられるとすれば、そんな権利など知られるべきではないでしょう。ユダヤ人が真理と理性的な自由を愛することができますか？そんなことをしても、市民的な制度とはどこであれユダヤ人にそうしたものを与えないようにするものであることを知って絶望するだけでしょう。ユダヤ人が国家の役に立てるようになることができるでしょうか？国家がユダヤ人に任せている唯一の仕事はお金です。限られた収入の道にも多大な税金が課せられているのですが、これが私の同胞たちに定められている唯一の使命なのです[37]」。

バゼドウの思想は同時代的には大きな反響を呼んだものである。その思想が最初に発表され

たのは、著作『真理愛』（1764年）によるが、「それについてどう思うか？」とメンデルスゾーンは友人のアプトに聞いている[38]。

また、やや遅れてその反響はケーニヒスベルクからもやってきた。1777年、『ケーニヒスベルク学術政治新聞』に二度にわたり汎愛学舎に関する記事を載せたのはカントである。カントはこの記事において、学校の改革ではなくその抜本的な革命を訴え、バゼドウの学校に多大の期待を寄せている。カントは、「このような教育施設は、もはや単に美しい理念なのではなく、長らく望まれてきたことが実現可能であることの明らかな証明として、実際に目に見える仕方である[39]」とまで言っている。

この点、それが理念倒れに終わることを見抜いていたメンデルスゾーンの慧眼は、教育の理念が往々にして無視している社会の現実に向けられていたと言えよう。「自由学校」の構想は、そうした問題意識のもとに立てられている。

5.「自由学校出版」について

1784年、フリートレンダーは出版社を設立した。

この出版社は、「自由学校出版（Verlag der jüdischen Freischule）」と名乗ることもあったが、もともとは「オリエンタル出版（Orientalische Buchdruckerei und Buchhandlung）」という名称で国務大臣のミュンヒハウゼンによって認可されたものである。

しかし、なぜ学校と併せて出版業を営む必要があったのだろうか？

その目的は、出版業によって学校の維持費を賄うということにあったようだ。しかし、政府はこの出版社にドイツ語の本を出版することを認めなかった。認められたのは、競合相手のいないヘブライ語の出版物の印刷、販売のみであった。

そこで、この出版社は、最初の頃はメンデルスゾーンによる聖書のドイツ語訳（ヘブライ文字）などを出していたが、だんだんと、急進的な思想家であったウェッセリの本や[40]、雑誌『ハ・メアセフ』なども出すようになる。これは、結果として伝統的なユダヤ人社会からの強い反発を呼ぶことになる。学校はドイツ語の読み書きを教えるが、その出版社からはヘブライ文化を宣揚する啓蒙主義者（メアセフィム）たちの声が配信される。ここに、ハスカラ運動の大きな矛盾点があったように思われる。

もちろん、それがハスカラ運動だと言ってしまえば、それまでであるが、それはまた政府の意向を離れて自律的に展開されたものではなかった、ということである。ウェッセリを「出版の自由」という観点からして擁護したのは、ツェドリッツという後の国務大臣であった[41]。

この点は、メンデルスゾーンの親戚であったベンジャミン・ブルフがデッサウに設立した出版社と比べた場合にまた別の問題を浮かび上がらせることになる。この出版社はヘブライ語の書籍しか出版していなかったが、そこで再版されたマイモニデスの『迷える者達の導き』などの中世の哲学書がメンデルスゾーンに与えた影響は測り知れない。それは、また初期ハスカラと言われる前駆的な啓蒙運動を展開させた一要因としても無視できないことである。

これと比べた場合、結果としてヘブライ語の本のみを出版せざるをえなかった「自由学校出版」は、ハスカラ運動を推し進めたかもしれないが、広い意味での啓蒙主義の理念には逆行したとも言えよう。もっとも、出版社の目的が学校運営の費用を賄うことにあったのであれば、それも仕方のないことなのかもしれない。

6.「自由学校」とは何か？

教育学の古典とされるラウマーの『教育学史（Geschichte der Pädagogik）』（1843−55年、全四巻）やシュミットの『教育学史（Geschichte der Pädagogik）』（1860−62年、全四巻）、『教育史（Geschichte der Erziehung）』（1884年）などには、この学校に関する記述がない[42]。こうした事情は現代においても変わらず、「啓蒙の時代のユ

ダヤ人の教育は、ドイツの教育学ではほとんど知られていないばかりか、そもそも少ししか研究されていない[43]」ということである。

そのためもあってか、日本における数あるプロイセンの教育史研究のうち、その代表的なものである梅根悟の『近代国家と民衆教育――プロイセン民衆教育政策史――』(1967年）や田中昭徳の『プロイセン民衆教育政策史序説』(1969年）などにもこの学校に関しては何も書かれていない。

しかし、この学校はバゼドウの汎愛学舎と並んで、ドイツの教育史において重要な位置を占めているように思われる。それは、ただ民衆教育史の上からしてそうであるのではなく、教育学史の上からしても、その教育というものが学校教育のことであるならば、この「自由学校」の存在は無視されてはならないのである。

フリートレンダーによる学校設立案が、一世代前のエフライムとイッツッヒによる「貧民学校」設立案（1761年）に基づいていることは間違いない。七年戦争によって、エフライムやイッツィヒといった商人たちは莫大な富を築いたのであった[44]。1761年にはエフライムが豪邸を建て、1765年にはイッツィヒが豪邸を建てている。その婿養子であったフリートレンダーもこの豪邸に住んでいたのである。自由学校も設立当初はイッツィヒの旧家にあった[45]。裕福な彼らは、その富を教育を通じて社会に還元しようとしたのである。

では、フリートレンダーの学校は彼らの学校設立案をそのまま実現しただけのものだったのであろうか？それはやはり、「貧民学校」を目指したものだったのだろうか？

Freyschuleを標榜するこの学校は、「自由学校」というよりも「無料学校」と、あるいはその両方の意味をとって「自由（無料）学校[46]」と言われることもあるが、それはFreyschuleのFreyという言葉の解釈による。

例えば、J. カッツは次のように指摘している。「Freischuleという表現は学校が無料であり、貧しい者からお金を取らないということを意味していた[47]」。

では、なぜそのような学校を設立する必要があったのか？

その理由をカッツは次のように述べている。「啓蒙主義者たちは〔…〕裕福な者や知識人たちは、貧しい子どもたちに対して責任を感じていた。なぜなら、第一にそれこそが啓蒙主義の本質だからであるが、第二に、新しい教育がそうした子どもたちを非ユダヤ社会に適応していける生産的で立派な人間にすると考えられたからである[48]」。

第一の点に関しては、この学校は「啓蒙主義の世界観に基づいて設立された[49]」と指摘されることもあるように当然のことであって、啓蒙主義的な平等観に基づいた教育の場として、広く子供たちに開かれた学校をつくることが求められていた、ということであろう。

しかし、この点は必ずしも「ベルリン自由学校」の特徴とは言えない。

例えば、C. ロスはゲットーでの生活に関して次のように述べている。「シナゴーグのそばには、以前は大抵その中に学校が設けられたことを考慮して、学校ができた。それは、いつでもユダヤ人の生活様式の中で誇り高い地位を与えられており、この点ゲットー時代のユダヤ人は、その民族の古代の理想に劣るものではなかった。どんな小さな場所にも、その教育施設をもっており、それは多くの場合、そのため特別に設けられた信仰団体により管理されていた。千名を越えないユダヤ人社会が『無料の学校』を維持していたが、それは今日でも模範となり得るものである。この費用はすべて自発的な寄付によってまかなわれ、両親からは何ら費用を期待しなかった。その地方の言葉の初歩がヘブライ語と並んで教えられた。教師の数、クラスの大きさも綿密に規制されていた。とりわけ驚くべきことは、貧しい生徒が実際に無料給食を受けていたことで、それに毎年冬の初めには長靴と服が配給された。所によっては女子の学校があり、このように教育の普及していたことは、

今日でさえ西欧世界のいかなる国にもほとんど例をみない[50]」。

つまり、こうしたゲットーの学校は、ゲマインデによって維持されており、「無料の学校」であったということである。そして、そうした学校はヘブライ語の教育と共に当地の言葉も教えていたということである。

この点、「ベルリン自由学校」はゲマインデからは金銭的な援助を受けてはいなかった。この学校もまた「無料の学校」ではあったが、その費用は主としてイッツィヒの貨幣鋳造業やフリートレンダーの絹織物業による収入によって賄われていたのである。そのために、いわばサイドビジネスとして出版社を経営するという必要性もあったわけである。

1782年には、プラハに「師範学校(Normalschule)[51]」が政府によって設立されている。これはヨセフ二世の寛容政策によって現実化したものである。この学校も独自に作成した教科書を使っていたが、それはキリスト教徒によるものであった[52]。また、政府主導とはいえ、費用はゲマインデによって賄われていたのである。

これと比較すれば、「ベルリン自由学校」の特徴は明らかである。

「ベルリン自由学校」は商人たちによる学校であった。

そこで、この学校で使われていた教科書にはヘブライ語が一切なかったのである。ドイツ語を教えることで子供たちに社会参画の自由を与える、それがこの学校の目的であった。なぜなら、フリートレンダー自身の言葉で言えば、それこそが「市民的自由[53]」というものだからである。

つまり、カッツの言うところの二点目、「非ユダヤ社会」に出て行くための能力を子供たちに与えること、それが「ベルリン自由学校」の大きな目的だったのである。また、そのためにこそ、この学校は無料でもあった、ということなのではないだろうか？

Freyschuleを「無料学校」と訳してしまうと、その意義は見失われてしまうのである。

7. 実際の学校運営について

それどころか、この学校は必ずしも無料ではなかったようだ。メンデルスゾーンの友人であり、ベルリンで出版業を営んでいたニコライが次のように証言している。「この学校には80人の生徒がいて、その半分くらいが無料で授業を受けている[54]」。

開校以来、生徒の数はつねに60人から80人ほどであった。多くの寄付金が寄せられたようだが、大半の生徒が学費を払わなくて済むようになるには、かなりの時間がかかった。学校の設備は不十分で、教室は二部屋ほどしかなかった。場所も転々としていたようである[55]。費用を賄うために、学校に置かれていた大理石でできたメンデルスゾーンの像も売りに出された。（買い手がつかず、結局はフリートレンダーが買った。）

確かに、Freyschuleという言葉は、当時の「貧民学校（Armenschule）」を指す言葉でもあった。この場合、それは「無料学校」を意味する。当時のベルリンには、16の貧民学校があり、1000人ほどの生徒数を有していた[56]。こうした学校は、宗務局の管轄下にあった村落学校とは異なり貧民監督局の管轄下にあった。

プロイセンの学校教育が、一つには貧民学校の設立から始まっていることは疑いない。フランケによる孤児院設立を皮切りとして、1700年頃からはたくさんの貧民学校が設立されている。

しかし、こうした学校はプロイセンの重商主義政策によって営利化されていくことになる。1747年に「ベルリン実科学校」が設立されたのを皮切りとして、1793年には「ベルリン産業学校」が設立されている。また、隣国のボヘミアおいても「産業学校」が1777年に設立されている。こうした傾向を受けて、農業貧民学校や産業貧民学校といった学校が登場し、貧民学校は簡単な手仕事（養蚕など）を行う「産業学校」となっていったのである。

この点、「ベルリン自由学校」は商人によって設立された私立学校であるため、あくまでも読み書きの勉強を中心とした学校であった。もっとも、生徒たちの在籍期間は二年で、卒業後は何らかの職業に就くことが求められていたようである。そうした意味では、この学校は「産業学校」に近いものであったのかもしれない。

それは、自主的に設立された学校でありながら、やはり当時の風潮を無視して成り立つものではなかったのである。しかし、当時のプロイセンの教育政策が村落学校を中心としたものであったことを考えれば、ベルリン自由学校は優れて市民的な学校であったと言えるだろう。それも、それは「市民的自由」を社会において獲得するための学校であった。

また、この点はベルリン自由学校の運営資金がフリートレンダーやイッツィヒ自身によるものであったことからしても強調されなくてはならない。バゼドウの学校は、当地デッサウの領主フランツ・レオポルドを始めとして、多くの領邦君主たちの資金援助を受けて設立されたものであった。汎愛派の世界市民的な教育思想が結局は国民教育思想になってしまったことについては既に述べたが、それにはこうした資金面での事情も背景としてあったと言えよう。ベルリン自由学校が優れて市民的な学校であったことの理由は、資金調達の面においても求められるのである。

ところで、中世以来、ドイツには三種類の学校があったと言われる[57]。

一つは、ドイツ語の読み書き学校である。これは、商業都市に設立された市民学校であった。また、宗教改革後には日曜学校などでも子供たちが勉強していたようである。その他にも、伝統的なラテン語学校（都市学校）には、初等課としてドイツ語を教える予備学校というものがあった。

こうした学校は全てドイツ語の読み書きを教えているという点で共通している。この点において、ベルリン自由学校もまたそうした学校の一つと言えるだろう。

しかし、ドイツにはまた「もぐり学校(Winkelshule)」と言われるような非公式な学校がたくさんあった。「ベルリン自由学校」もまたそうした学校の一つと考えることはできないだろうか？それは、国家の学校令に倣うことのなかった学校なのだから。そうした意味では、この自由学校は現代におけるフリースクールの原型ということでもまた「自由」な学校であったと言えるのかもしれない。

ただし、その「自由」の意味は、現代におけるフリースクールが求めているような自由とは大きく異なるものである。「ベルリン自由学校」がプロイセンにおける公教育に対する反動であったバゼドウなどの汎愛主義に代表されるオルタナティヴ教育思想の一つによるものであることは間違いないが、それはただ既成の教育から自由であることを目指したものではなく、社会への参画という積極的な意味での自由を志向するものであった。こうした現代的な見地からしても、「ベルリン自由学校」の歴史的な意義は再評価される余地を残していると言えよう。

8. 結び

フリートレンダーは、1804年には仕事を引退し、以後は政治活動に専念することになる。そこで、学校の方も、1806年からはL. ベンダヴィットが校長を務めることになった[58]。以後、学校は実学の色を強めることになる。キリスト教徒の入学も許された。これは、当時はまだ新しかった「宗派混合学校（Simultanschule)」の試みに倣ったものとして評価できる。

しかし、社会の大勢はむしろ逆方向へと進む。フリードリヒ・ヴィルヘルム三世の治下、1819年にはユダヤ教徒の学校からキリスト教徒が締め出されることになる。また、それに先立って、1812年にはユダヤ教徒にも義務教育が課せられている。そこで、1823年には、ベルリンのゲマインデが新しい学校を設立する計画を立案することになった。その新しい学校のモデルとして選ばれたのは、確かに「ベルリン自由学校」で

ある。しかし、啓蒙の時代は終わり、ゲマインデは保守主義の色を強めつつあった。その煽りを受けて、「ベルリン自由学校」は1825年に閉校したのである。

【注】

メンデルスゾーンの全集（*Jubiläumsausgabe*）は*JubA*と略記する。なお、メンデルスゾーンの手紙からの引用は、この全集版の第11巻から第13巻に収められたものによる。

1 学校教育法の第一条に則った「法律の定める学校」のこと。
2 例えば、それは「運命との出会いにおいて決意する自由」と説明される。吉田敦彦「ブーバーの対話哲学とシュタイナー学校の教育現実」『理想』694号、2015年、26頁。
3 山下肇『近代ドイツ・ユダヤ精神史研究』有信堂高文社、1980年、84頁。
4 cf. I. H. Ritter, *David Friedländer: Sein Leben und sein Wirken,* Berlin, 1861, pp. 36 f.
5 *JubA,* Bd. 23, 1998, p. 417.
6 cf. M. A. Meyer, *The Origins of the Modern Jew,* Wayne State UP, 1967, pp. 70 f.
7 D. Friedländer, *Lesebuch für jüdische Kinder: Zum Besten der jüdischen Freyschule,* Berlin, 1779.
8 *Allgemeine deutsche Bibliothek,* Bd. 51, Stück 1, Berlin-Stettin, 1782, p. 206.
9 M. Nagel, The Beginnings of Jewish Children's Literature in High German: Three Schoolbooks from Berlin (1779), Prague (1781) and Dessau (1782), p. 42. (*Year Book,* Leo Baeck Institute, XLIV, 1999, pp. 39–54.)
10 Ritter, *op. cit,* p. 46.
11 J. Gutmann, Geschichte der Knabenschule der jüdischen Gemeinde in Berlin (1826–1926), p. 9. (*Festschrift zur Feier des 100 jährigen Bestehens der Knabenschule der jüdischen Gemeinde in Berlin,* Berlin, 1926, pp. 7–138.)
12 *Das Berlinische Buchstabier- und Lesebuch,* 3Bde, 1760 (?)
13 開校は1778年であるが、早くも1793年には閉校している。しかし、その最後の校長を務めたノイエンドルフがアンハルト＝デッサウ侯国の学校監督官を任されることにより、当地での学校教育政策は汎愛派の思想に基づいて進められることになる。
14 J. B. Basedow, *Kleines Buch für Kinder aller Stände,* Leipzig, 1771.
15 F. E. Rochow, *Versuch eines Schulbuches für Kinder der Landleute oder zum Gebrauch in Dorfschulen,* Berlin, 1772.
16 F. E. Rochow, *Der Kinderfreund,* Brandenburg-Leipzig, 1776.
17 J. H. Campe, *Neue Methode, Kinder auf eine leichte und angenehme Weise Lesen zu lehren,* Altona, 1778.
18 J. G. Sulzer, *Vorübung zur Erweckung der Aufmerksamkeit und des Nachdenkens,* Berlin, 1771.
19 C. F. Weiße, *Neues ABC-Buch,* Frankfurt-Leipzig, 1773.
20 ズルツァーはメンデルスゾーンと親しくしていた学者であるから、その影響は大きかったと考えられる。cf. Z. Shavit, From Friedländer's Lesebuch to the Jewish Campe: The Beginning of Hebrew Children's Literature in Germany, p. 398. (*Year Book,* Leo Baeck Institute, XXXIII, 1988, pp. 385–415.)
21 この点については以下の論文に詳しい。田中昭徳「「一般学事通則」の成立過程と性格」『日本の教育史学』2号、1959年。
22 J. B. Basedow, *Vorstellung an Menschenfreud und vermögende Männer über Schulen, Studien und ihren Einfluss in die öffentliche Wohlfahrt,* Leipzig, 1768.
23 J. B. Basedow, *Des Elementarbuchs für die Jugend und für ihre Lehrer und Freude in gesitteten Ständen,* Altona-Bremen, 1770. なお、1774年には"Elementarwerk"と名を改めて第二版（四巻本）が出されている。
24 このリストは以下に掲載されている。寺田光雄『民衆啓蒙の世界像──ドイツ民衆学校読本の展開──』

ミネルヴァ書房、1996年、34頁。

25 もっとも、汎愛主義者たちが宗教教育を行わなかったわけではない。しかし、それは理性の宗教による教育であった。cf. T. Brüggemann, in Zusammenarbeit mit H-H. Ewers, *Handbuch zur Kinder- und Jugendliteratur: Von 1750 bis 1800,* Stuttgart, 1982, p. 827.

26 Von Mendelssohn an E. F. Klein, Aug. 29, 1782. 引用文中、「不品行」とあるが、これは「教養（Bildung）」と並んでハスカラ運動の一つのキーワードであった。cf. G. L. Mosse, Jewish Emancipation, Between Bildung and Respectability. (J. Reinharz, W. Schatzberg (eds.), *The Jewish Response to German Culture,* Hanover-London, 1985, pp. 1−16.)

27 メンデルスゾーンの友人であったニコライによる1759年の段階での証言。E. J. Engel, Friedrich Nicolai an Johann Peter Uz: Ein frühes Zeugnis zu Moses Mendelssohns ‚Lehrjahren ‘, p. 26. (C. Lowenthal-Hensel, R. Elvers (hgg.), *Mendelssohn Studien,* Bd. 6, Berlin, 1986, pp. 25−40.)

28 メンデルスゾーンの没後に、ニコライが次のように証言している。「優秀なモーゼスにとっても、最初の頃はドイツ語で支障なく表現することはとても難しいことであった。決して彼にとっての母語ではないこの言語の性格を少しずつ正確に掴むために、信じられないほどの努力がなされたのである」。G. B. Mendelssohn (hg.), *Moses Mendelssohn‘s Gesammelte Schriften,* Bd. 5, Leipzig, 1844, p. 205.

29 F. Nicolai, *Beschreibung der Königlichen Residenzstädte Berlin und Potsdam und aller daselbst befindlicher Merkwürdigkeiten,* Bd. 3, 3ter Anhang, p 7.

30 D. Friedländer, *Moses Mendelssohn: Von ihm und über ihn,* Berlin, 1819, p. 35.

31 梅根悟『西洋教育思想史2』誠文堂新光社、1968年、118頁。

32 同上、119頁。

33 F. E. Rochow, *Vom Nationalcharacter durch Volksschule,* Berlin, 1779.

34 梅根『西洋教育思想史2』、5頁。

35 以下の論文を参照。金子茂「ドイツ型「近代化」とF. E. v. ロヒョウの民衆教育思想」『教育学研究』第32巻第4号、1966年。

36 H. ワイマー、W. ツェラー『ドイツ教育史』平野一郎監訳、黎明書房、125頁。

37 Von Mendelssohn an Basedow, April (?), 1768.

38 Von Mendelssohn an T. Abbt, Nov. 20, 1763,

39 I. Kant, *Werke,* Bd. 2, Berlin, 1912, p. 450.

40 初版には出版地も出版年も記載されていないが、ウェッセリの『平和と真理の言葉』（1782年）を最初に出版したのはおそらくこの出版社である。なお、同書をドイツ語に訳したのはフリートレンダーである。ウェッセリ自身、一時は「ベルリン自由学校」とその出版社で働いていたことがある。cf. C. L. Ozer, Jewish Education in the Transition from Ghetto to Emancipation, p. 79. (*Historia Judaica,* IX, 1947, pp. 75−94.)

41 M. Kayserling, *Moses Mendelssohn's philosophische und religiöse Grundsätze,* Leipzig, 1856, pp. 308 f.

42 ただし、『教育史』の第2巻から第5巻が編者を変えて1889年から1902年にかけて出されているが、このうちの第4巻第2分冊には「ベルリン自由学校」に関する間接的な記載がある。cf. *Geschichte der Erziehung vom anfang an bis auf unsere Zeit,* bearbeitet in Gemeinschaft mit einer Anzahl von Gelehrten und Schulmännern von K. A. Schmid, fortgeführt von G. Schmid, Bd. 4, 2te Abt., 1898, pp. 476−502.

43 B. L. Behm, *Moses Mendelssohn und die Transformation der jüdischen Erziehung in Berlin: Eine bildungs geschichtliche Analyse zur jüdischen Aufklärung im 18. Jahrhundert,* Münster, 2002, p. 22.

44 1764年には、ゲマインデの上位5％の富裕層が支払っている税金が、総額にして全体の43%にも達するという状況であったが、こうした状況は1780年頃から始まる不景気に至るまで続いた。cf. S. M. Lowenstein, *The Berlin Jewish community,* Oxford UP, 1994, p. 26.

45 cf. F. Nicolai, *Beschreibung der Königlichen Residenzstädte Berlin und Potsdam und aller daselbst befindlicher Merkwürdigkeiten,* Bd. 2, p. 861.

46 山下『近代ドイツ・ユダヤ精神史研究』、84頁。

47 J. Katz, *Out of the Ghetto,* Syracuse UP, 1998 (orig. 1973), p. 126.

48 ibid., p. 127.

49 Shavit, Aufklärung und jüdische Schulbildung in Berlin: Friedländers Lesebuch, p. 107. (M. Awerbuch, S. Jersch-Wenzel (hgg.), *Bild und Selbstbild der Juden Berlins zwischen Aufklärung und Romantik,* Berlin, 1992, pp. 107–120.)

50 C. ロス『ユダヤ人の歴史』長谷部真、安積鋭二訳、みすず書房、1966年、206–207頁。

51 「師範学校」という名称からのみ判断すれば、これは教員養成所（ゼミナール）が付設されていた「モデル学校」のことである。それは、「模範学校（Musterschule）」とも言われる。しかし、同校はまた「ユダヤドイツ学校（Judisch-deutsch Schule）」という名も持っていたようであるから「師範学校」という名称にはあまり意味がないのかもしれない。

52 この教科書を作成したのはボヘミアの学校監督官を務めていたキンダーマンであるが、それに際して意見を求められたのはメンデルスゾーンであった。cf. Von F. K. Ritter von Schulstein an Mendelssohn, Mai 5, 1783.

53 *JubA,* Bd. 23, 1998, p. 421.

54 Nicolai, *op. cit,* pp. 699 f.

55 学校の窮状については以下の論文に詳しい。P. Dietrich, U. Lohmann, „Daß die Kinder alller Confessionen sich kennen, ertragen und lieben lernen.“ Die jüdische Freischule in Berlin zwischen1778 und 1825. (I. Lohmann, W. Weiße (hgg.), *Dialog zwischen den Kulturen: Erziehungshistorische und religionspädagogische Gesichtspunkte interkulutureller Bildung,* New York, 1994, pp. 37–47.)

56 cf. F. Vollmer, *Die preussische Volksschulpolitik unter Friedrich dem Großen,* 1918, p. 282.

57 この点については以下を参照した。E. シュプランガー『ドイツ教育史』長尾十三二監訳、明治図書、1977年。

58 ベンダヴィッドが受けた教育については以下に詳しい。M. Stern, Jugendunterricht in der Berliner jüdischen Gemeinde während des 18. Jahrhunderts. (*Jahrbuch der Jüdisch- Literarischen Gesellschaft,* XIX, 1975.)